

澤野久雄

月の女

月の女

辛三八〇

昭和四十一年十月二十五日発行

著者 澤野久雄

発行者 古川司

発行所 佼成出版社

東京都杉並区和田一丁目四十一番八
電話(三三三)一六三二
振替口座東京四一〇二五

著者との話
し合いによ
り検印は省
略します

印刷 三容堂 佼成出版社 製本 一重製本

© 1966 Hisao Sawano

★落丁・乱丁本はおとりかえいたします

沢野久雄

月の女



ヒューマン ブックス

目 次

莓
127

紀伊椿
103

千鶴退場
71

幻聴
39

月の女
7

跫
音
251

他
人
の
娘
217

春
の
落
葉
189

如
月
小
路
159

月の女

7 月 の 女

そんな時刻に、鳥越が事務所へ戻って行ったのも奇妙なことだったが、ちょうどそれをねらってでもいたかのように、女の電話がかかって来たことも、ひどい偶然だった。

夜、七時前、四谷見附に近いそのビルは深閑としていた。どの部屋にも、もう鍵がかかっていただろう。いや、八階建ての瀟洒なビルの、五階から上は高級住宅になっていた。女の、一人暮らしが多い。通りから見るとそれらの部屋の窓にだけ、夜も灯が入っている。しかし、四階から下は事務所ばかりである。夕方になると共に、人の気配が薄くなる。鳥越が入って行った時は、コンクリートの廊下はしんと静まっていた。物音もない。自動エレベーターを三階で降りると、靴音のひびくのが、気になるようであった。

彼はそつと鍵をあけ、扉のきわのスイッチを入れた。足音を殺して部屋に入ると、疲れたよ

りに腰を下した。煙草に火をつける。その途端に、電話が鳴り出したのである。

悪いことをしていたわけではないにもかかわらず、彼はかすかに狼狽し、あわてて手をのばした。

——今ごろ電話をかけて来たところで、誰もいるものか。

その事務所の人は、五時になるとみな帰ってしまふ。鳥越はその部屋のほんの一部、——いわば、デスク一つを借りているにすぎない。だから、毎日この部屋にかかる電話の九十何パーセントは、鳥越に用事のあるものではなかった。しかし、受話器を手にとると、

「鳥越さんですか？ ああよかった、いて下さって……。あたし清井です。お分りになりませんか？ 銀座で、よくお茶を御馳走になる清井……。」

ああ、と彼は肯いた。

娼婦である。行き会えば、立話をする。お茶ぐらい、一緒に飲む。が、それだけのことだ。それ以上の交渉が、一度でもあったわけではない。名前も聞いた覚えはあるが、顔の印象ほどには彼の中に残っていなかった。

「ちよっとお会いたいです。話があるんです。」

「分った。」

と彼は言った。

「これから、すぐ行くよ。」

しかし彼は、その女に会いたいと思ったわけではなかった。むしろ、滅入っている気持ちを、その女に会うことで塗りつぶしてしまおうと思っただけである。

彼はその日、古い友達の一人在、癌センターに入院したという話を聞いた。懇意にしていた先輩が、同じ癌で死んでから、まだ二か月と経っていなかった。

「えらくみんな、死に急ぐな。」

と、その時、鳥越は言ったものだ。

「そろそろ、俺たちの番もまわって来る頃かな。」

鳥越は、まだ四十代のなかばだった。いわば、仕事に一番、油の乗る時期であった。けれども、何年か前に勤めていた会社がつぶれて以来、何をやっても巧くゆかない。本の装釘をたのまれるとか、——これは専門外の仕事だが、この頃ではショオ・ウィンドウの装飾まで引受けた。ある大会社の宣伝部の仕事を手伝っている内に、そんなことにまで手を出すようになったのだ。経済的にはひと頃よりはいくらか楽になったが、それでも不安定な生活である。そういう日常の中で、知人が一人ずつ欠けてゆくのは、まるで自分も、急いで晩年を迎えようとでもしているように心せわしい。

清井千加子の電話を切ると、彼はすぐに部屋を出た。通りに出ると、空車に手をあげた。四

谷の通りも、この時間になると意外に暗かった。暗く広い電車道を、いくらか肌寒い風が吹いていた。

——それにしても、おかしいことがあるもんだ。

車を走らせながら、彼は苦笑した。清井千加子から電話がかかるというのが、どう考えても不思議だった。いままでに、彼女の電話の声を聞いたことなど、一度もないのである。大体、彼の事務所のありかも、いつ教えたのか記憶にない。

数年前まで、鳥越は小さな出版社にいて、夜になると、必ず銀座をほつつき歩いたものだ。

毎夜、——実際、日曜をのぞく毎夜のことだから、町角に店を出す甘栗屋のおばさんとも、顔見知りになってしまった。花売りの女は、こんばんは、と言ってすれちがってゆく。裏道を歩いている娼婦たちの中にも、会えば会釈をかわす女が増えた。そういう中で、ある晩、肩をよせて来たのが清井千加子だった。お茶でも飲みませんか、と声をかけられて、一緒にお茶を飲んだ。ホテルへでも誘いたい様子だったが、僕はもう帰るよ、コーヒーを飲みおわると、千円札で支払いをさせて、釣銭は持って行ったらいい、君の時間を大分とっちゃったからね。——

その日以来、月に一度かふた月に一度ぐらい、彼は清井に行き会った。どちらにも連れがなかったりすると、一緒にコーヒーを飲んだ。蕎麦屋の暖簾を、分けたこともある。二、三回目までは、更にどこかへ彼を誘おうとする気配が見えたが、鳥越は一度も応じなかった。そして

今では二人の間に、近所づき合いとでもいう程の親しさが生れているのだった。女の生活の端々が、月日の経つにつれてよく見えて来ている。奇妙なつき合いはそのままが続いていた。

しかし、偶然にゆき会以外、会おうと言って会ったことはなかった。

——今夜だって、忙しいといえばそれですんだはずだ。

車の中ではそう思ったが、約束した町角で女の顔を見ると、彼はふと気持の和む^{なご}気がしたものだ。

「どうしたの？ 突然、電話をかけて来たりして……。」

「すみません。ちょっとおねがいがあつて……。」

「珍しいね。」

「ちょっとだけつき合つて下さいね。」

うん、と肯くと、女は通りがかりの車に手をあげた。機敏な動作だった。どこへ連れてゆくのか、と思ったが、鳥越は訊かなかった。ホテルへゆく気など、鳥越の中に少しもないことは、長年のつき合いで女にも分っている。しかし、

「この前お話した友達に、ちょっと会つてやつて下さい。」

走り出した車の中でそう言われると、彼は愕いたように相手の顔を見直すのだった。

「いい人なんだけど、全く運が悪くて……。」

可哀そうな人だと、はじめて野末あきの話をした夜、清井は低い声で言った。

山陰の出だが、夫に死別して、二年前に上京したという。あてにして来た親戚から無惨な扱い方をされて、姑に当る老母と、五つの男の子を抱えて、工場につとめている。

「なにしろ月給が安いでしょう？　もう一万円もあればどうにか暮らせるんだけど、それがどうしても足りないの。バアへでも出たいって言うけれど、そういうタイプの人ではなし、着物を持っているわけでもなし、だからといって場末のバアへでも働きにゆけば、落ちてゆく先が見えているわ。」

そういつてかすかに笑ったのは、ふと、自分の身をかえり見たからかもしれない。

その時は、噂話だけですんだから、彼はそのまま野末あきのことは忘れていた。が、

「いまその人、あたしの家に来ているの。ね、出来たらその人を、可愛がってあげてくれなにかしら？」

そのひとことで、清井の意図ははっきりした。それも、今夜ひと晩だけ、つき合えというのではないようだった。親しくして、月に一万円ほど、援助してやってくれと言っているようにで

ある。

鳥越は、不意にあわれだった。僅か一万円で、一人の男に縋^{すが}りつこうとする女、そういう女を、鳥越に紹介しようとしている女。あるいは清井千加子は、こういう取引きに馴れているのかもしれない。しかも充分に心を配って、嫌味のないようにことを運んだつもりかもしれない。が、彼の気持が傷ついたことは、否定出来ない。

「あなた、変な女じゃ気味悪いんでしょう？　だけど野末さんは清潔よ。あたしが保証するわ。もし不潔な人なら、バアへでもなんでも、どんどん働きにやっってしまうわ。」

こういう言い方は、この女なりに論理が通っているのかもしれない。しかし、鳥越の常識からは、やはり逸脱していた。彼は一瞬、運転手に命じて、車をひき返させようかと思つた。が、そうしてしまえば、清井は落胆するだろう。野末あきという女も、あるいは失望するのかもしれない。

——やっぱり、会うだけは会ってやる方がいいかもしれない。

車の着いた先は、渋谷から大分奥まった辺りのアパートだった。アパートというよりは、住宅というべきだろう。それぞれ玄関のついている家が、上下に二軒ずつ。

——なかなかいい所に住んでいるじゃないか。
と、言おうとした時、ドアは内側から開いた。

「いらっしやいませ。」

二十七、八だろうか。こまかな花模様の、化繊と見える着物を着て、えんじ色の帯を締めた女が深く頭を下げていた。頸が細い。貧しさが、その頸の細さに出ていようであった。

「さあ、お連れしたわよ。あなたの会いたがっていた人を……。」

清井は三和土で、乱暴に靴をぬいだ。踵と踵をこすり合わせるようにして脱ぐと、一方の靴がとんで横倒しになった。

狭い玄関の次の間が、四畳半の部屋になっていた。つき当りに、小さな台所が見えている。可愛い茶棚が、一つ置かれていた。その前に、折りたたんだ丸い食卓が立てかけてあった。しかし、そのほかには何もない。壁に吊り下げた一枚のブラウス以外には、目にふれるものもない部屋である。

「さあ、野末さん……。」

清井はストッキングの足を、持ち扱いかねたように崩して坐って、

「こちらが鳥越さんよ。ね、安心したでしょう？」

「よろしく……。」

野末あきという女は、羞じらいながら挨拶をした。

「やあ、噂は清井さんから聞いていました。しかし、今夜はまるでさらわれて来たようなも

ので……。」

なるほど、田舎から出て来て、生活にはもまれたであろう。が、まだ気持まではすれていない。そういう人柄が、娼婦である清井の同情さえかちえたのだと、鳥越は忽ち納得するのである。しかし、娼婦を抱くことさえ好まない鳥越だった、不潔だというばかりではない。金を代償にして女を思いのままに扱うということが、どうにも性に合わないのだ。するとあきのねがいも、——彼女自身が、それをねがっていると断定した場合の話だが、——裏切らなければならないわけである。

「働いているんですってね……。」

「工場で、何をしているの？」

黙っているわけにもゆかないから、当りさわりのない話をした。

清井が、紅茶を淹れて来ると、

「向うの部屋へ、行ってごらんなさい。」

あきが、清井に囁いた。

何？ いいから、行けば分る、——そんな問答がくり返されて、清井は四枚つづきの襖の、一番端の一枚を開いた。灯のない、暗い部屋に姿を消す。と、

「あら、どうしたの？ これ……。」